

「正しい日本語」から「楽しい日本語」へ

2018年1月

NPO法人日本語教育研究所

西原鈴子

概要

- 「楽しい日本語」の前提となること
- 外国語学習は何を目的とするか
- なぜ活動中心のカリキュラムなのか。
- なぜ「正しい日本語」では不十分なのか
- 学習者と母語を共有する教師の仕事

「楽しい日本語」の前提となること

(1) 学習者中心主義 (cf. D. Nunan 1988)

- * 学習は教室の中で完結するのではなく、教室の外での真のコミュニケーションに備えることが重要
- * 教室活動は、教室の内と外の社会との関係を大切に運営されなければならない。

(2) 活動中心のカリキュラム

- * 言語学習は、ことばについての知識を獲得するのではなく、ことばを使って真のコミュニケーションを行い、グローバルな視野を養うために行われる。

(3) 言語学習の目標設定

- * 学習者に明確に提示される。
- * 学習者が納得する内容

日本語教育界が注目してきたこと

日本語

教授法

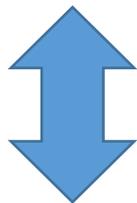
学習者

言語学習の目的



習得した言語によって
人生が豊かになる

言語学習の目標



- ・真のコミュニケーション力を磨く。
- ・相対的社会認知力を獲得する。
- ・グローバルな視点に立って物事を俯瞰できるようになる。
- ・偏見から解放される。
- ・普遍的価値観に基づいて社会に貢献できるようになる。
- ・グローバル人財として活躍するようになる。

外国語学習の目的(1): 初等中等教育

外国語の学習・習得は、それ自体が目的というだけでなく、手段としても位置付けられている。

(オーストラリア教育省)

★外国語学習によって子ども達の認知的発達、および社会的発達(知的、教育的、文化的な成長)が期待できる。

★外国語学習は、文化を越えたコミュニケーションと理解によってコミュニティに存在する多文化リソースをより高めることができる。

外国語学習の目的(2)成人

三つの原則(Council of Europe)

- ★多様な言語と文化の豊かさは価値のある共通資源であり保護され、発展させるべきものである。
- ★異なる母語を話す人々間のコミュニケーションは、相互理解と協力を促し、偏見と差別をなくす。
- ★現代語の学習と教育によって、国家間の政策の協調、協働が進展するように図ることができる。

外国語学習の目的(3)新しい展開

Key Competency(OECD)

現代および将来の課題解決に必要な広い範囲の
コンピテンシー

- ★相互作用的に道具(言語・シンボル・テキスト・知識・情報・技術)を用いる。
- ★自律的に活動する。
 - ・大きな展望・文脈の中で行動する。
 - ・人生計画や個人的プロジェクトを設計し、実行する。
 - ・自らの権利、利益、限界、ニーズを守り、主張する。
- ★異質な集団で交流する。

21世紀型スキルのリスト:米国の事例

(グリフィン・マクゴー・ケア 2014)

- 思考の方法
 - (1) 創造性とイノベーション
 - (2) 批判的思考、問題解決、意思決定
 - (3) 学び方の学習、メタ認知
- 働く方法
 - (4) コミュニケーション
 - (5) コラボレーション(チームワーク)
- 働くためのツール
 - (6) 情報リテラシー
 - (7) ICTリテラシー
- 世界の中で生きる
 - (8) 地域とグローバルのよい市民であること(シチズンシップ)
 - (9) 人生とキャリア発達
 - (10) 個人の責任と社会的責任(異文化理解と異文化適応能力を含む)

外国語学習から得られる能力

言語運用能力

- 言語知識
- 社会文化知識
- コミュニケーション力

自己管理能力

- 自分の学習ストラテジーを知る
- メタ認知能力

異文化適応能力

- 違いを知る
- 違いを調整する
- 新しい価値観を得る

言語教育の世界で起こっている考え方の変化

- 学習観

知識とは「知っていること」プラス「できること」

学習のプロセスは人によって多様

- 教育観

教えたいように学ばせる→学びたいように導く

- 教育・学習の目標設定

当面の目標と最終目標がある。

グローバルな社会参加のために学ぶ

- 多様な評価

多様な知識のあり方に呼応する

多様な学習目標に呼応する

言語教育界のパラダイム・シフト

言語教育・学習の目標は、

「ことばについて何を知っているか」



「ことばを使って何ができるか」
(課題遂行能力)

を達成することにシフトしている

パラダイムシフトを支えた研究動向(1)

— 知識のしくみ —

(海保 & 柏崎 2000)

・宣言的知識

意味的知識(論理知): 命題

エピソード的知識(体験知): イメージ表象

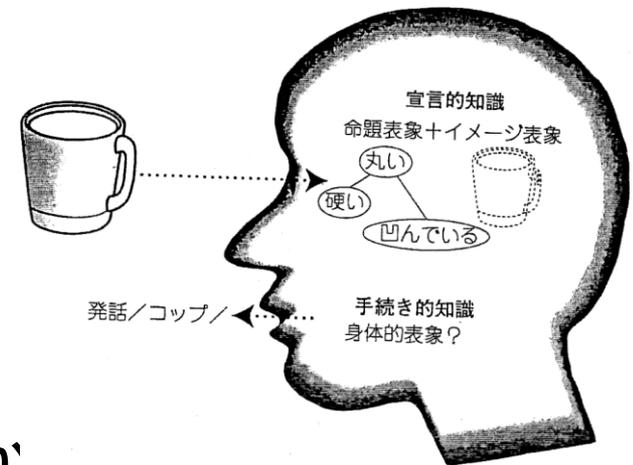
・手続き的知識

行為を支える暗黙かつ自動化

された技能に関わる知識

ルールベース: 「いかに~するか」

モデルの模倣



パラダイムシフトを支えた研究動向(2)

コミュニケーション能力 (Canale & Swain 1980)

- ・言語的能力: 文法や語彙の力
- ・社会言語的能力: 異なった状況の中で適切に言語を使用する能力
- ・談話能力: 長い会話に参加したり、かなりの量の書かれたテキストが読める能力
- ・方略能力: 限られた知識を最大限に生かす言語能力
コミュニケーションが困難なときに何とか切り抜ける能力

パラダイムシフトを支えた研究動向(3)

状況的学習論(Lave & Wenger 1991)

- ・学習は、文化的共同体の実践に参加することを通じて半ば潜在的になされる。
- ・学習は単なる知識・技能の習得過程ではなく、共同体の成員として一人前になる過程
- ・学習者と教育者の間に明確な区別はなく、新参者もやがて古参者になる。
- ・学習指導は、行動—支援型の認知的徒弟モデル

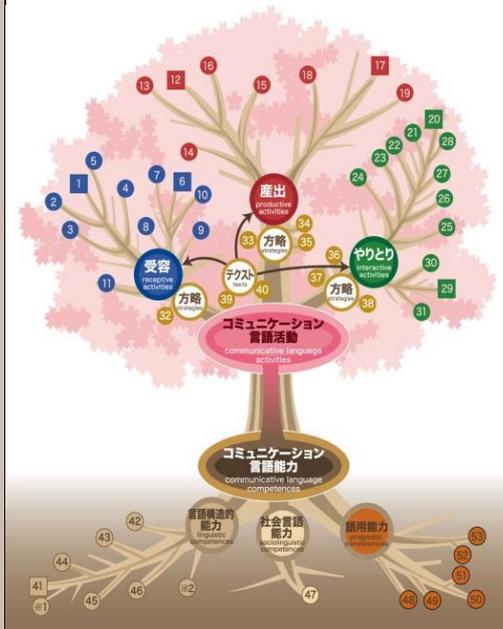
コミュニケーション言語能力 (communicative language competences)

木の根として表現され、言語によるコミュニケーションを支えるもの

「言語構造的な能力」：語彙、文法、発音、文字、表記などに関する能力

「社会言語能力」：相手との関係や場面に応じて適切に言語を使う能力

「語用能力」：ことばを組み立てたり、役割や目的を理解する能力



コミュニケーション言語活動 (communicative language activities)

言語能力を基盤として、木の枝のように広がり、多様性があるもの

読んだり聞いたりする「受容」、話したり書いたりする「産出」、会話などを行う「やりとり」、さらにその3つをつなぐ「テキスト」やそれぞれの活動と能力をつなぐ「方略」などがある

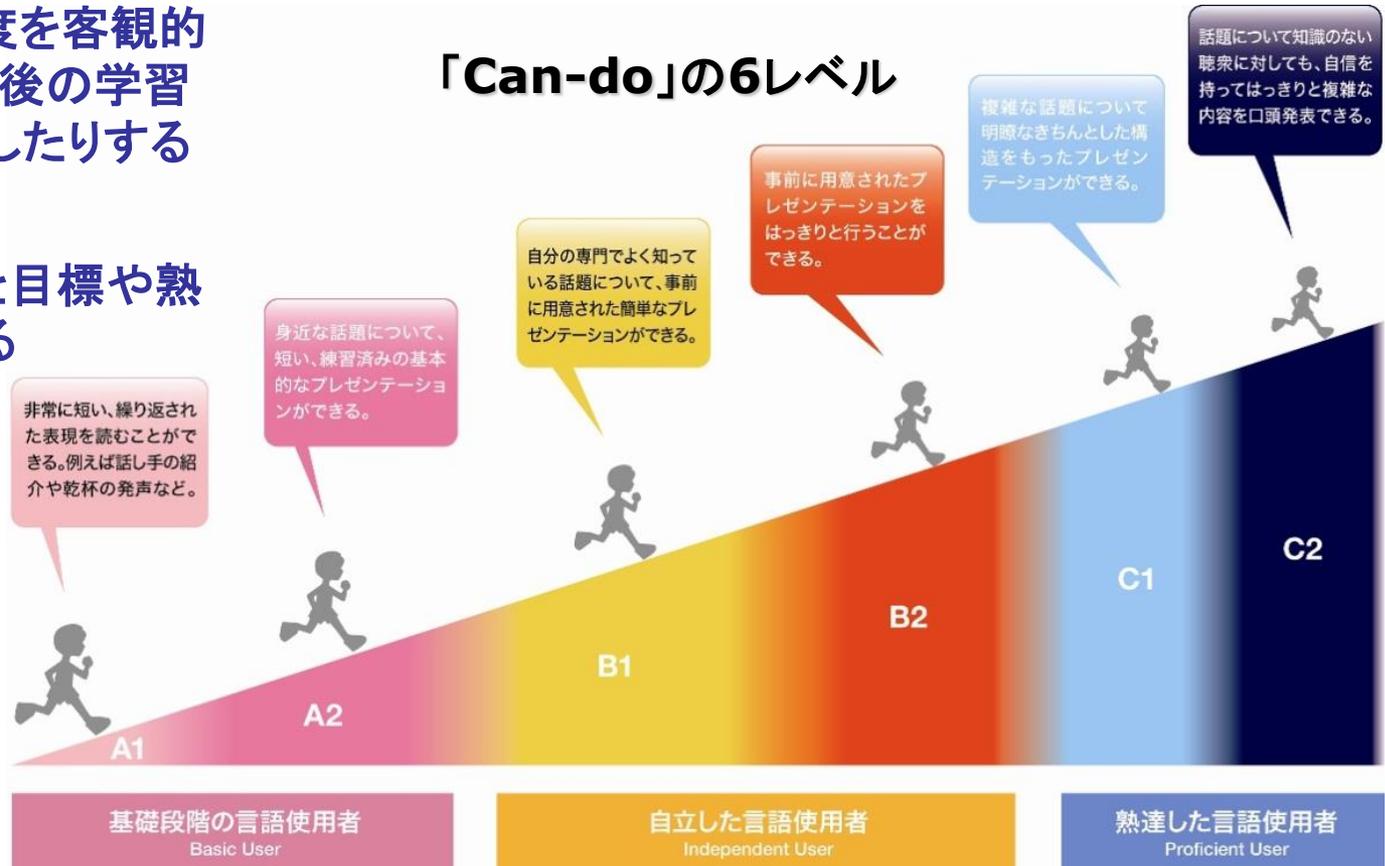
実際にコミュニケーションを行う際には、これら以外にも、文化に対する知識や専門知識、学習能力などさまざまな能力が必要となる

「Can-do」とは

「Can-do」とは、日本語の熟達度を「～できる」という形式で示した文
「Can-do」には、6つのレベル(A1,A2,B1,B2,C1,C2)がある ※

「Can-do」を使うことで、

- ・日本語の熟達度を客観的に把握したり、今後の学習の目標を明確にしたりすることができる
- ・他の人や機関と目標や熟達度を共有できる



非常に短い、繰り返された表現を読むことができる。例えば話し手の紹介や乾杯の発声など。

身近な話題について、短い、練習済みの基本的なプレゼンテーションができる。

自分の専門でよく知っている話題について、事前に用意された簡単なプレゼンテーションができる。

事前に用意されたプレゼンテーションをはっきりと行うことができる。

複雑な話題について明瞭なきちんとした構造をもったプレゼンテーションができる。

話題について知識のない聴衆に対しても、自信を持ってはっきりと複雑な内容を口頭発表できる。



A1

A2

B1

B2

C1

C2

基礎段階の言語使用者
Basic User

自立した言語使用者
Independent User

熟達した言語使用者
Proficient User

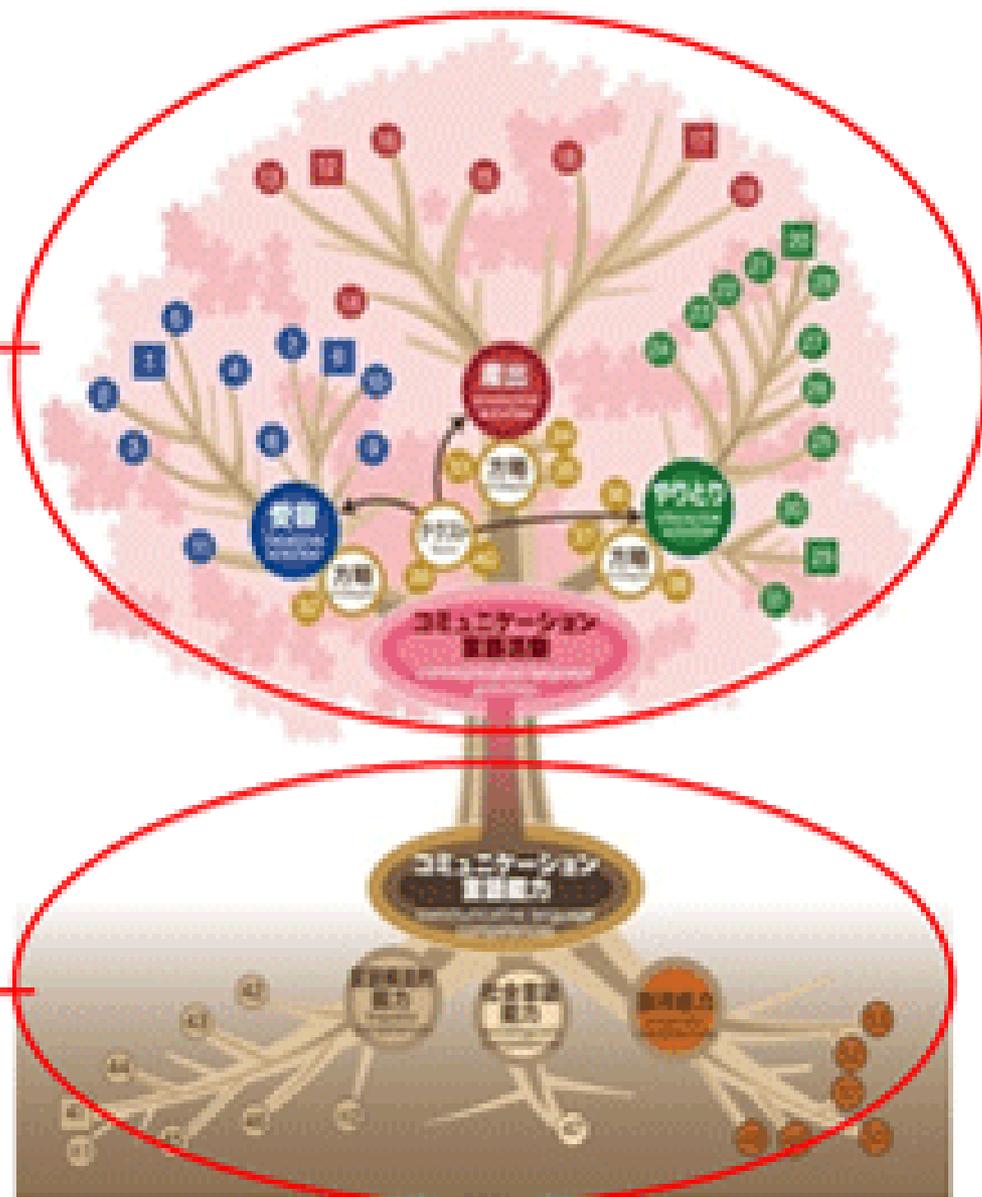
JFスタンダードと 2つの『まるごと』

「かつどう」

- ・コミュニケーション言語
活動中心
- ・すぐ日本語を使いたい人
のため

「りかい」

- ・コミュニケーション言語
能力中心
- ・日本語についてよく知り
たい人のため



学習の動機づけ

内発的 動機

行動自体が目的
になっている

自己充実のために
学習が生起・
維持(知的好奇
心・自主的学習)

外発的 動機

報酬/利益を得
る手段としての
学習

学習には外的誘
引が必要

動機づけと日本語学習の目標

内発的動機付けによる場合

- ・日本人とコミュニケーションをとる。
- ・日本文化/日本社会/日本人を理解する。
- ・日本/日本人/日本社会の専門家になる。

外発的動機付けによる場合

- ・日本関連企業の仕事に就く。
- ・対日2国間の仕事に就く。(政治・経済・文化的側面)
- ・国際的な仕事に就く。

国際交流基金海外日本語機関調査から 見えてくる中等教育段階の課題(1)

(1) 日本語学習の目的・理由:

マンガ・アニメ・J-ポップ・ファッションへの興味が最も多く、世界全体では67.5%、台湾では77.2%

(2) 積極的に授業に取り組む学習者:

世界全体では75%以上いると答えた学校が46.4%、50%が40.4%、25%以下が12.2%

台湾では75%が38.7%、50%が47.5%、25%以下が7.4%

中等教育段階の課題(2)

(3) 教材の適切性:

世界全体では、現在使っている教材は教える内容・目的の面で適切であると答えた学校は46.7%、どちらともいえないは46.1%

台湾では適切が16.5%、どちらともいえないが76.6%

日本語教育機関調査から見えてくる教師の課題 － 学習者の不熱心 －

なぜ不熱心になってしまうのか？

- ・必修選択科目だから動機は低かったけれど履修した？
- ・成績が大学入試に直接影響しない？
- ・アニメ・漫画・Jポップに興味があるのに、学習内容が動機を反映していない？
- ・学習したら何が得られるのか、ゴールが示されていない？
- ・就職・留学後に本当に役に立つコミュニケーションを学んでいるのか分からない？

どうすれば熱心になるのか

- ・内発的動機を持つ場合 → 興味関心を教育に繋げる。

例： 日本^の歴史・社会・文化
日本^のサブカルチャー

「本物」を反映した
学習コンテンツ
(テーマ・教材・活動)

- ・外発的動機を持つ場合 → 目標を教育に繋げる。

例： 日本^の大学生活
日本^の企業文化

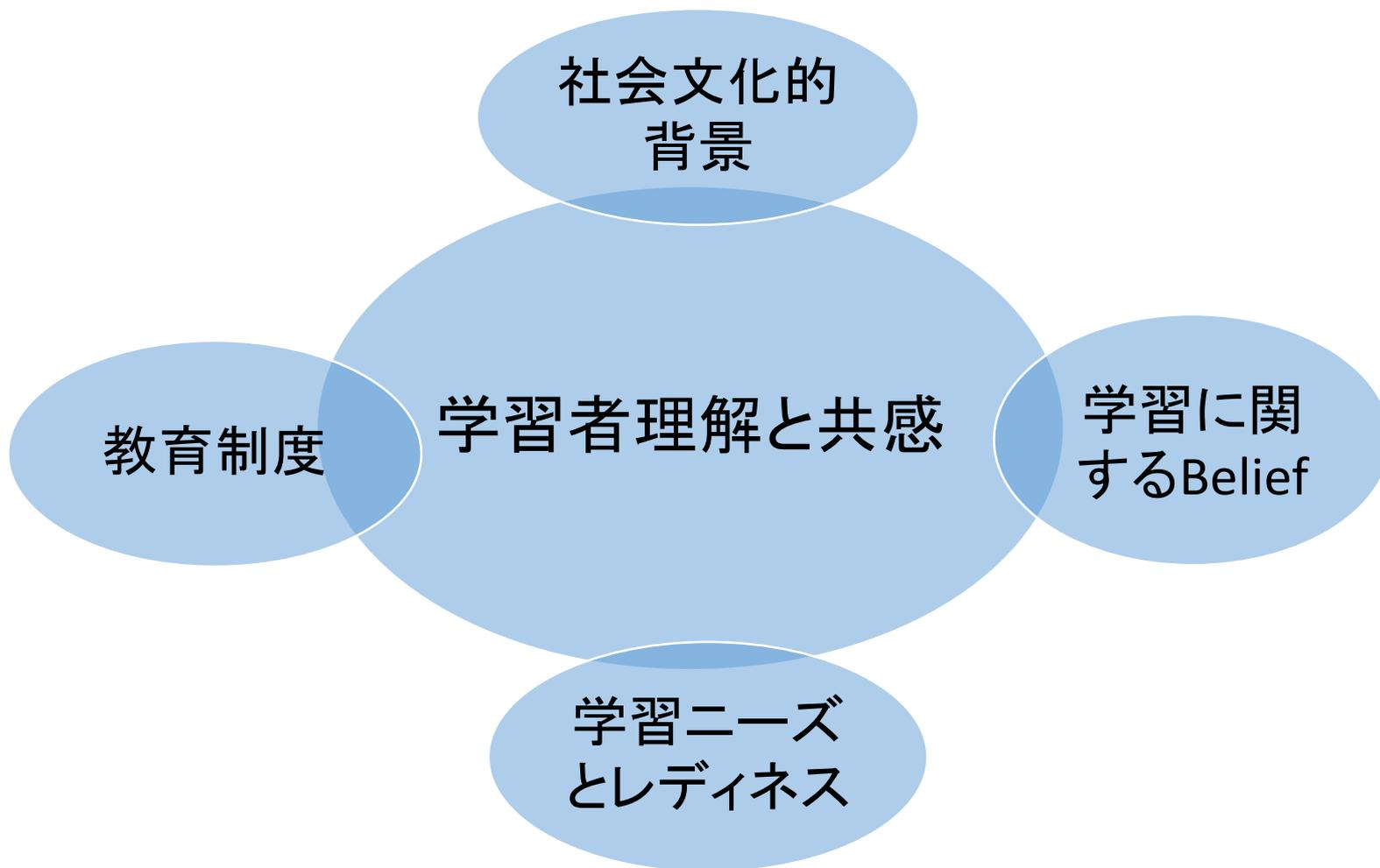
夢と希望に繋がる
コンテンツ

正しい日本語 → 楽しい日本語

これからの教師の仕事

- 学習目標の明確な提示
- Can-do 達成のためのパフォーマンス重視
のカリキュラム作成と実践
- やる気を引き出すための反転授業
- 「正しい日本語」 → 「楽しい日本語」
- 学習者と共に伸びて行く教師

学習者と母語を共有する利点



学習者と母語を共有する教師の大きな役割

- 学習者の文化的背景、学校文化がわかる。
適切なカリキュラム設計
- 学習者のロール・モデル
真面目に努力すればいつか先生のようにになれる。
- 学習者の理解者
学習の障壁の原因解明、説明が共感的にできる。
- 学習者の相談相手
現実的な解決方法が提示できる。

日本語非母語話者日本語教師の能力

分析能力

- 対照分析(母語と日本語)
- 学習文化(学習動機・学習不安)
- 学習目標

説明能力

- 対照分析→説明
- 学習文化→説明
- 学習目標→説明

評価能力

- 個々のポートフォリオ評価
- 共通参照枠による評価
- 目標設定に対応する評価

参考文献

- Canale & Swain 1980 Theoretical bases of communicative approaches to second language teaching and testing. *Applied Linguistics* 1, 1-47
- Leve & Wenger 1991 Situated learning: Legitimate peripheral participation. 佐伯胖(訳) 1993 『状況に埋め込まれた学習－ 正統的周辺参加』 産業図書
- Ministerial Council on Education, Employment, Training and Youth Affairs 2005 *National Statement for Language Education in Australian Schools.*
- Nunan, D. 1988 *The Learner-Centred Curriculum.* Cambridge University Press.
- Trim, J., North, B., Coste. D. 2001 *Common European Framework of Reference for Languages: learning, teaching, assessment.* 吉島茂他(訳編)2004 『外国語の学習、教授、評価のためのヨーロッパ共通参照枠』 朝日出版社
- 海保博之・柏崎秀子 2002 『日本語教育のための心理学』 新曜社
- 鹿毛雅治 1996 『内発的動機付けと教育評価』 風間書房
- 国際交流基金 2012 『JF日本語教育スタンダード2010 第二版』
- 国際交流基金 2017 『2015年度海外日本語教育機関調査』
- ドミニク・S・ライチェン & ローラ・H・サルガニク(編著)(立田慶裕監訳) 2006 『キー・コンピテンシー 国際標準の学力を目指して』明石書店
- グリフィン・マクゴー・ケア(編)(三宅なほみ(監修)2014 『21世紀型スキル 学びと評価の新たなかたち』 北大路書房